

浦和実業学園中学校

2016年度

入学試験問題

<第1回 午前4型>

国語

時間 50分

【受験上の注意】

1. 合図があるまでは、問題用紙を開かないでください。
2. 受験番号・氏名は問題用紙にも必ず記入してください。
3. 解答はすべて解答用紙の所定のところに記入してください。
4. 解答用紙は使いやすいように折ってもかまいません。
5. 問題用紙は回収しません。書き込みをしたり線を引いたりしてもかまいません。
6. 字数制限のある問題の場合は、句読点や符号、促音「っ」・拗音「ゃ」「ゅ」「ょ」なども一字分として字数に含めます。

受験番号	氏名

一

次の各問いに答えなさい。

問一

——部のカタカナを漢字に直しなさい。

- (1) 勇気をフルう。
- (2) 大陸をジュウダンする。
- (3) ウチユウ旅行を夢みる。
- (4) センモン家の意見をきく。
- (5) ケンポウ記念日。

問二

——部の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

- (1) 釣り糸を垂らす。
- (2) 朗らかな人柄。
- (3) 決戦に挑む。
- (4) 新記録を樹立する。
- (5) 純白のドレスを着る。

問三

次の□には人間の身体の一部を表す言葉が入ります。その言葉を漢字一字で答えなさい。

- (1) 彼は楽しいことには□がない。
- (2) 娘の活躍に□が高い。
- (3) 意外な発言に□を疑った。
- (4) 自信が足りないため二の□を踏む。
- (5) あまりの強さに□が立たない。

問四

各文の―部をふさわしい敬語表現に直し、ひらがなで答えなさい。ただし、□一つをひらがな一字分とします。

- (1) 先生がお一人でするのですか。
↓ 先生がお一人で□□□□のですか。
- (2) かしこまりました。明日、そちらに行きます。
↓ かしこまりました。明日、そちらに□□□□ます。
- (3) どうぞ遠慮なく見てください。
↓ どうぞ遠慮なく□□□□ください。
- (4) ありがとうございます。では早速見ます。
↓ ありがとうございます。では早速□□□□します。
- (5) 申し訳ございません。その件につきましては知りません。
↓ 申し訳ございません。その件につきましては□□□□□□□□ません。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

【第1段落】学校の生徒の中には、試験では一〇〇点満点をとれば万々歳、という人がたくさんいる。一〇〇点がとれる人が一番すごくて、七〇点とか六〇点ぐらいではダメだと考える。しかし、それは旧式な考えだ。

日本では一九世紀からつい最近まで、満点のほうが一〇〇点や六〇点よりいいと、学校も世の中も考えていた。その結果、いつしか社会は活力を失ってしまった。満点至上主義に陥ったことで、本当に優れた、ものを考える力、判断し、理解する力を持った人がどんどん減ってしまった。

今では大学に行く人の数は昔の何十倍、ひよつとすると百倍を超すかもしれない。毎年たくさんの人が大学生になるのはいいけれども、一方で、ただ試験の点数さえ良ければ大学に合格できてしまうという現状になってしまっている。みなさん、大学に受かるのが優秀な人間なんだと勘違いしている人もいるかもしれないが、考えを改める必要がある。

いったい、「満点をとる」とはどういうことだろう？――私に言わせれば、それは「頭が機械的に優秀である」ということだ。

丸暗記をしたり、わけもわからず全部覚えてしまっていると、たいていの場合は満点になりやすい。それに対し、多少なりとも自分の頭を働かせて理解しようとする頭は、なかなか一〇〇点満点をとることができない。よくても九〇点、だいたいは七〇点から八〇点ぐらいのところである。そういう人たちは、有名な大学や難関の高等学校に入れなかったりする。A、その人たちが悪いわけじゃない。今までの社会が、考える頭よりも機械的な知識をありがたがってきたからにすぎない。

もちろん、一〇〇点をとっても構わない。点をとること自体は決して悪いことではない。しかしながら、一〇〇点をとったからといって得意になったりいばったりなんかするのはトンデモないことだ。逆に、五〇点六〇点だからといって

恥じたりする必要もない。本来は五〇点六〇点でも充分いい成績なんだから。一〇〇点満点の答案の作成なんてコンピューターに任せておけばいい。人間よりコンピューターのほうが、記憶力はずっとすぐれている。それに引きかえ、七五点の答案を書くということは、機械にはできない作業である。

【第2段落】私が教師をしていた時、どうもこのクラスにはカンニングをする者がいるらしい、とにらんだことがあった。そこで、満点の答案は外し、点をいくらか引かれているものの中から、まったく同じ箇所^{かしよ}で間違っている答案を探し出すことにした。まるつきり同じ間違いをする答案というのは元来、存在しないはず。同じだったらどちらかが他人の解答を丸写ししたのだ。

残念ながら、満点の答案ではそういう証明はできない。満点の答案の中では誰もが同じことを書くからだ。ところが、まったく同じ箇所^{かしよ}で二五点引かれるなんていうことは人間としてはまずあり得ない。その二五点に、その人だけの個性や考えがかくれて存在する。その人なりの生き方や感じ方、その人しか持ちえないいろんなものが入り混じって減点されることになる。

B

、まったく同じところで、同じように点を失うことはまずあり得ない。もしあるとしたら、それこそ必ずカンニング。実際、その答案の主を呼び出してとちめると、スミマセンって言う。

点を失うってこと自体はあんまり良くないことだ。その反面、満点を喜ぶのは幼稚^{ようち}である。もしも、一〇〇点満点をとれないからといって、頭が悪い、と思い込んでいるのなら、^③いますぐにその考えを改めたほうがいい。満点をめざして努力するのは結構だが、満点であること自体は大したことではない。

これから社会で立派な仕事をしていくには、そういう一九世紀から引きずってきた古くさい考えを捨て去る必要がある。丸覚えした知識を試験の時に書き連ね、その点数がいいと優秀であると喜ぶのは、もはや単純で、遅れた考え方なのである。

I

【第3段落】これからの時代、これまでとは少し違った勉強をする必要がある。

これまで考えられてきた勉強というものは、大体において「知識」、ないし情報を取り込むことであつた。小学校からひたすらに知識を頭に入れ、試験の時にはその知識を使つて答案を書いて、点をとるのである。この知識というものは、大変有用であると考えられている。

ウ

しかし、満点の答案を書く^①として^②いる人たちが持っているような知識がたくさんあつても、それは本当の人間の力ではない。

問題は、それが本当に人間として大事な能力であるのかどうかだ。ただ知識ばかり集めて喜んでいると、だんだん馬鹿^{ばか}になる。

C

、学校でこんなことを考えたら授業を行うことができなくなってしまう。それで、そういうことは言わないことになっている。

小学校からだんだん知識が増えていき、それと引き換えにどんどん頭がはたらかなくなってしまう。ここで言う「頭が悪い」というのは、「新しいことが考えられない」「判断をする力がない」ということ。

知識が増えると、どうしてもその知識をそのまま使用して物事を処理しようとしがちになる。自分自身で考えることが、ついついおっくうになりがちだ。本に書いてあることをそのまま頭の中に入れ、それによっていれば自分で考える必要はなくなる。

【第4段落】

知識をありがたがるのは歴史的なもので、どうにもならないこともある。ヨーロッパでは一六世紀の終わり頃^{ころ}には、知識というものは社会的価値を持つているという考え方が確立した。以来、教育機関はとにかく知識を身につけることを教えた。それが大体今も続いている。

E

詰め込んでいけば、頭の中はいずれ知識でいっぱいになるが、それは良いこと、素晴らしいことだとみなされる。だが本当にそうだろうか？ 自分の頭の中が、他人が考えた知識、本に書いてある知識で満杯^{まんぱい}になることが、そんなにいいことだろうか？ トンデモないことでむしろ逆だ。そんな知識だけの頭では身動きが取れなくなってしまう。いわば、

④ 知識メタボリック症候群。知識のぜい肉で太ってしまつと、軽やかで柔軟な思考など到底望めなくなる。

知識メタボリック症候群の人は、一〇〇点満点の答案を書けるかもしれないけれど、この先三〇年もすれば、結局はつまらん人間にかなりえないということがわかってくるだろう。心ある人は自分の責任で、自分の力でものを考えて行動できる人間でなければいけないと気づくことになる。例外はもちろんあるけれど、だいたいにおいて知識が増え、ものを考える力が減っていく。知識と思考の間では比例の関係が成り立つのである。

(外山滋比古『知ること、考えること』)

問一 — 部①「旧式な考え」とありますが、これは今までのどのような社会であつたために生まれた「考え」と言えますか。「社会」という言葉につながるように、【第1段落】より二十三字で探し、最初の五字を抜き出して答えなさい。

問二 — 部②「頭が機械的に優秀である」とありますが、これはどういうことですか。それを説明したものとして、適当でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分の思考を放棄すること
- イ 知識や情報を絶対視すること
- ウ 人間的な感情にあふれていること
- エ 物覚えが良いということ

問三 — A C に入る言葉として、最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | | | | |
|---|---|---|------|---|------|---|-------|---|-----|
| A | ： | ア | また | イ | しかし | ウ | たとえば | エ | さて |
| B | ： | ア | けれども | イ | その一方 | ウ | だから | エ | 仮に |
| C | ： | ア | もつとも | イ | つまり | ウ | したがって | エ | すると |

問四 — 部③「いますぐにその考えを改めたほうがいい」とありますが、これはなぜですか。その理由を説明したものとして、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア テストで満点を取るのにはすばらしいことだが、それだけで人間の価値が決まるわけではなく、むしろ、自分の力で考え行動することのできない人間になってしまう可能性があるから。
- イ 子どもの頃にテストの点数が悪い人間ほど、大人になってから自主的に勉強するようになり、いずれは、成績のよかった人間に追いつくようになると考えられているから。
- ウ テストが満点であったことを自慢げに話すような人間は、自己中心的な考え方をしており、他人への配慮が欠けているといえるから。
- エ 頭の良し悪しは、すぐにわかるわけではない上に、立派な大人として社会で活躍することさえできれば、テストの点数など取るに足りないものといえるから。

問五 — 部④「知識メタボリック症候群」とありますが、これはどのようなことを指しますか。「」がなくなることで」という言葉につながるように、【第2段落】より十一字で探し、最初の五字を抜き出して答えなさい。

問六 本文には次の一文が抜けています。この文を入れるのに、最も適当なところはどこですか。本文中の ア イ より選び、記号で答えなさい。

◎ したがって知識をたくさん持つことは、その人間の価値を高められるのである。

問七 【第4段落】には、文脈上、意味が通じない漢字二字の言葉が使われています。次の【手がかかり】を参考にして、その言葉を探し、正しい形に直して、漢字三字で答えなさい。

【手がかかり】：その言葉には、本来、「非」「不」「反」「無」「未」のいずれかがついていなければなりません。

【三】 次の文章は、原田マハの小説『奇跡の人』の一節です。明治二〇年、アメリカ留学から帰ってきた弱視の女性、去場安（文中では安）は、青森の名家介良家の娘介良れん（文中ではれん）の教育係として弘前へおもむく。しかし、れんは目が見えず、耳も聞こえず、口も利けない三重苦を背負った少女であった。屋敷の暗い蔵に閉じ込められ、けもの子のように扱われていたれんを、安は人間らしく育てるために言葉とその意味をれんに献身的に教えていく。そこに、目の見えない三味線弾きの娘キワが現れ、れんとキワは生まれて初めて友達を持つことになる。安はれんとキワ、そして介良家の奉公人ひさの三人をともなつて、地元の夏祭りに出かけてゆく。よく読んであとの問いに答えなさい。

※ 【第1段落】 お祭りの宵は、何百と佇んでいる地蔵の前にろうそくが灯されて揺らめき、幻想的な風景を作り出していた。地蔵尊の門前には、たくさん※の提灯が下げられ、冷やしあめやところてんを売る露店が立ち、金魚すくいの周りには子供たちが賑やかに集っていた。
れんは、安とキワと両手をつないで、珍しそうに頭をあちこちに動かし、鼻をくんくんさせ、あーあーと声を上げて、いかにもうれしそうにしていた。「祭り」というものがどういものかわからないものの、長い時間待ちがれて、ようやくそのとき、その場所にやってきたのだという喜びを、れんは全身で表していた。

安たち一行が歩いていくと、目の前の人々がすうっと立ち退いていく。避けるようにして脇道へ行き、ひそひそと噂をする声が、安の耳に届いた。

（あれが、金木のお殿さん※の、盲のお嬢さだ）

（盲なばかりでねえ、耳も聞こえね、口もきけねだ）

（一緒にいるのは、東京から来たハイカラなおな※先生さまで。苦勞なこつでな）

(もうひとりのこんまいのは、はあ、たまげだな、^① 乞食^{ほいど}のボサマの子だそうだ) ※

ひそひそ、くすくす、嘲^{あざわら}り笑いが押し寄せてくる。キワはそれに気がついたのか、体を固くして、急に立ち止まった。

「どうしたの、キワ。あっちへ行きましょう。水飴^{あめ}を買ってみましょうか」

安が声をかけると、キワは、首を横に振って、

「おら、お堂に行く」

消え入りそうな声でつぶやいた。

「おら、れんさと、こんなふうと一緒にいたら、いけねえ。れんさまで、意地悪言われる……おらは、慣れっこだとも

……れんさは……れんさは、見せ物じゃねえだ」

そう言つて、突然^{とつぜん}、れんの手を振り切り、人ごみの中へ駆け出した。

「——キワ！」

安が叫^きんだ。異変を感じたれんが、あー、と声を上げた。

キワの小さな後ろ姿は、そのまま、祭りの人ごみの中へ消えてしまった。

【第2段落】 「キワ！ 行かないで、戻^{もど}ってきて！」

安は、必死に叫んだ。あたりを照らすのは、ほんやりと灯^{※いしちろう}った石灯籠と、夜店の提灯の光だけである。安の視力では、キワの行方を確かめることができない。

キワがいなくなってしまったことに気がついて、れんが顔を上げた。そして、安の手を引っ張り、「あー、あー」と言いながら、安の腰^{こし}のあたりをしきりに叩^{たた}いた。キワはどこにいいのかと、尋^{たず}ねているのだ。

安は、自分が迷子になってしまったように、どうしたらいいのかわからず、呆然^{② ほうぜん}とその場に立ち尽くした。

そこへ、夜店へ行っていたひさが、水飴を片手に戻ってきた。

「さあさあ、飴コ、買つてきだはんで。お嬢^{じょう}さ、召^めし上がってけろ」

飴^{から}の絡^{から}まった棒を差し出されても、れんは受け取ろうとしない。そこでひさは、キワがいらないことに気がついた。

「先生さま。キワは、どこさ行つたですか」

安は、血の気の失せた顔をひさに向けた。

「どうしましょう、ひささん。キワが、どこかへ行ってしまったの。迷子になったんじゃない、自分がれんと一緒にいたら、れんが意地悪なことを言われるからって……」

ひさの顔に、驚^{おどろ}きが浮かんだ。

「あのわらしが、そつたらこと……」

つぶやいてから、頭^{めづ}を巡^{めぐ}らせてあたりを眺めた。そして、

「先生さま。こっちへ」

安の手を取つて、暗がりのほうへと歩き出した。

「どこへ行くの。そっちは暗くて、私、よく見えないわ」

右手をひさに引かれ、左手でれんの手をしっかりと握^{にぎ}つて、安は、おぼつかない足取りでついていった。

ひさが向かったのは、地藏尊のお堂だった。その周辺には、四方に立てた竿^{さお}に筵^{※むしろ}を被^{かぶ}せただけのごく粗末な掛^かけ小屋が立ち並んでいる。その前には人々が列をなしていた。掛け小屋の中からは、ぶつぶつ、ぶつぶつ、老婆^{ろうは}の声が低く響^{ひび}いている。小屋と人々の影^{かげ}を認識した安は、小屋の中で何かただならぬことが起こっているようで、

「あれは、イタコの小屋掛けでござえます。お祭りのときだけ、やつとります」

安の心中を察したのか、ひさが言った。

津軽には、昔から、「イタコ」という盲目の巫女が存在していた。依頼者の要望に従い、神や死者の霊を呼び寄せて、それらになにかわって依頼者に話をしたり、諭したりする。これを「口寄せ」という。親しい人を亡くした者が、イタコの口寄せによって慰められるのだということを、ひさは、歩きながら安に教えてくれた。

安がイタコの存在を知ったのは、これが初めてだった。それにしても、また盲目の女性……。

ボサマといい、この地域には、盲目の女性ならではの生きる術がある。決して楽な道ではない上に、誰にでもできるものではなく、ある種の才能が必要とされる特殊な職業だ。安には、それが不思議でもあり、興味深くもあった。

イタコは、長く苦しい修行を経て靈感を宿した、神の語り部である。津軽の人々は、彼女たちの口を借りて語りかけてくる神や死者の言に耳を傾け、慰められるのだという。

【第3段落】 三人は、イタコの掛け小屋の前を通り過ぎ、お堂の近くへと歩んでいった。

「キワは、ボサマの家族と一緒に、ここで寝起きしてらはんで……まらず、ここまでは、たどり着けるはずです」

ひさが言った。案の定、お堂の中から、女の子のすすり泣く声が聞こえてきた。

三人は、石段を上り、ぴつたりと閉ざされている木戸の前に立った。安は、木戸の向こう側へ声をかけた。

「キワ。迎えにきたわ、一緒に帰りましょう。大丈夫よ、何も気にしないでいいから……」

すすり泣きの声が、ぴたりと止まった。

「開けてみますが」

ひさが木戸に手をかけて、がたがたと横に押し開けた。

堂の中は、真つ暗だった。そこに誰かがいるのかいないのかも、安の目には定かに見えなかった。が、人の気配があった。キワひとりではない。——もうひとり、誰かがいる。

「誰がいねが。キワ、返事しろ」

ひさが問いかけた。暗闇の中で、小さな影が動いた。

「おら……ここに泊まると思ったけど、婆さがおつでだ」

消え入りそうなキワの声がした。それを聞いて、やはりここにいたのだと、安はようやくほっとした。

「婆さまって、誰のこと？」

闇に向かって安が尋ねると、

「……おらだ。川倉のイダゴの、えいだ」

しゃがれた、低い声がした。安は、はっとして目を凝らした。

「そちさいるのは、金木の御殿の、ひさだが」

微動だにしない岩のような黒い影が、暗闇の中にあった。その影は、^④えも言われぬ磁力を放って、安を引きつけるようだった。

「川倉のイダゴの、長老です」

ひさが小声で安に囁いた。それから、影に向かって言った。

「ああ、婆さ、おらはひさだ。キワを連れに来た。そのわらしは、いま、金木の御殿で面倒をみてるだ」

キワの匂いを感じたのか、れんが、安と結んでいた手を振り払って、闇に向かって両手を突き出した。安が止めるまもなく、そのまま堂内へとまっすぐに歩み入り、まるで見えているかのように、キワに思い切り抱きついた。

「れんさ……おらと一緒にいたら、いぐね。いぐね……」

⑤キワが涙声で言った。れんをしつかりと抱きしめているようだった。安は、声が聞こえてきたほうに向かって、優しく言った。

「キワ、そんなことはないわ。れんは、ひとりであるよりも、あなたといたほうがいいの。ここにいたら、婆さまのお邪魔でしょう。さあ、一緒に行きましょう」

キワはすすり上げるばかりで、返事をしない。どうしたものかと、安は困り果てた。じゃら、じゃら、と数珠をこする音がする。イタコのえいが、手にしているのだろう。安は、耳をそばだてた。じゃら、じゃら、じゃら。ゆつくりと、立て続けに数珠をこする音が続き、やがて、低くつぶやく呪文のような声が聞こえ始めた。安は、自然と目を閉じて、頭を下げた。背後で、ひさも低頭する気配があった。

しばらくして、ごく静かな、**B** 威厳に満ちた声が聞こえてきた。

「……介良れん。この人には、とてつもない力がある。……去場安。あなたにも」

安は、驚いて、思わず顔を上げた。

いま、はつきりと、去場安、と聞こえた。

この場所に来てから、自分は一度も名乗っていない。さらに不思議なことに、えいの言葉には、まったく津軽訛りがなかった。まるで、えいではない誰かが話しているようだ。

安は、目を凝らして暗闇をみつめた。みつめればみつめるほど、闇は濃さを増すようだった。

すすり泣いていたキワも、いつもはじつとしていないれんも、存在を消してしまったかのように、しんとして、身動きひとつしない。

じゃら、じゃら、じゃら。じゃら、じゃら、じゃら。

長い沈黙のあと、えいの口を借りた誰かが、ごく静かに、安に語りかけた。

「いままでとは異なる手段を考えよ。……そのち、きつと奇跡が起こる」

安は、はっとした。そして、もう一度、大きく目を見開いた。

暗闇の中に、ぼうつと立ち上る靄のようなものが見えた。

いや、はつきりと感じた。

かすかな光のような、何か。しかしそれは、すぐに立ち消えてしまった。

「——安せんせ！」

突然、キワが、安の胸めがけてすがりついてきた。キワが離れてしまったからか、ああつ、と叫ぶれんの声が、堂内の静寂を破って響き渡った。

⑥ どんどん、どんどん、心臓が激しく高鳴っている。安は、片手でキワを、もう片手でれんをかき抱いた。

じゃら、じゃら、じゃら。じゃら、じゃら、じゃら。

考えよ、安。

れんの目は、耳は、口は、どこにあるのか、もう一度、考えよ。

あなたにしか、できない。

あなたこそが、奇跡を起こす人なのだ——。

【第4段落】 夏祭りが終わり、介良家別邸に、再び穏やかな日々が戻った。

地蔵尊のお堂で、偶然出会った老イタコ、えい。

何ものかが憑依したかのように、突然、預言めいた言葉を口にした。

まったく不思議な体験であった。あのときのことを思い出すと、何か足の下から震えが上がってくるような気がする。

あのと、えいに取り憑いていたのは、なんだったのか。

非常に霊的な何かが暗闇の中に降臨したような、厳かな空気があった。確かに、安は、それを感じ取った。

あれを、「神がかり」というのだろうか。

【中略】

どうすれば、彼女というランプに、明かりを灯すことができるのだろうか。

その火をつける、マッチはどこにあるの？

オイルも、薪も、紙も、燃えるものはたくさんある。

ただ、マッチだけがないのだ――。

安は、漫然と考えを巡らせながら、何気なく、キワがれんにしてやっていることを眺めていた。

最初、ふたりは、お互いの手を絡ませて、押し合いっこをしていた。そのうちに、キワが、れんの両手を取って、丸く握った自分のこぶしを触らせた。そのまま、くいつ、くいつと二度、ひねる動作をした。

――あ。

安は、目を見張った。

キワは、その動作の直後に、壁に立てかけてあった三味線を持ってきて、れんに触らせたのである。

れんは、三味線を端々まで触り、うれしそうに、あー、と声を出した。

そのあと、またすぐに、キワはれんに自分のこぶしを握らせ、さっきと同じようにひねる動作をした。れんの両手が何かを捜すように宙をさまようと、その手にもう一度、三味線を触らせた。

これは――手話だ。

安は立ち上がると、ふたりのそばへと早足で歩み寄った。安の気配に気づいたキワが、顔をこちらに向けた。

「キワ。あなたいま、れんに何か教えてあげたの？」

キワは、こくんとうなずいた。

「『ジャミセン』って、教えだ」

「どうして？ れんは、『ジャミセン』って綴りを、知っているのよ。いつものように、手のひらに指で綴ってあげたらいいでしょう？」

キワは、「だども……」と、うつむいた。

「れんさ、もちよこちはで、手、引っ込めるだ。『ジャミセン』で綴るの、めんどくせがら……」

ばちで弦をかき鳴らす動作を、「三味線」ということにした。もちろん、れんとキワのあいだでしかわからない「サイン」だ。

どくんどくん、どくんどくん。あの夜と同じように、激しく高鳴る心臓の音が、体じゅうに響き渡った。

安は、れんの手を取って、いつものように「ジャミセン」と手のひらに綴ろうとした。

すると、れんはそれを振り払って、その代わりに、安の手を握った。そして、何かを待っているような顔つきをした。れん。――ああ、そうだわ。

そうだったんだわ――！

安は、思わず、れんを抱きすくめた。れんは驚いて、手足をじたばたさせた。安は、れんを離すと、今度はキワを思い切り抱きしめた。「安せんせ……？」

キワは、突然の抱擁に、不思議そうな顔になった。

「ああ、キワ。ありがとう。……わかったわ、ありがとう」

とうとう、みつけた。火をつけるマッチを。

れんの目と耳と口は、「手」にある。
れんに「触手話」を教えるのだ——！

※注 ・地蔵尊……お地蔵さんを敬った言い方。

・盲……目の見えないこと。

・ハイカラ……流行を追ったり、新しがったりすること。そういう人。

・ボサマ……津軽地方の旅芸人のこと。多くは盲人の男性で、ときに女性や子供も一行に加わり、各家の門前で

三味線を弾きながら民謡などを歌い、お金などをもらう。

・石灯籠……石でつくられたともし火を安置するための用具。

・筵……しき物の一種。

・巫女……神霊につかえる女性。

・別邸……ふだん住んでいる家とは別に構えた家。

・憑依……霊などがのりうつること。

・降臨……天上に住むとされる神仏が地上に來臨すること。

・漫然……特別の目的もなく、ある行動などをするさま。

問一

——部①「キワはそれに気がついたのか、体を固くして、急に立ち止まった」とありますが、「キワ」がこのような
になった理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア キワ自身が人々から貧乏な旅芸人であると見下されている点に、がまんできなかったから。

イ 安先生を不快にさせるような嫌味を言っている人々を、どうしても許せないと思ったから。

ウ 大事な友達であるれんが悪く言われるのは、自分の責任だと罪悪感を持ってしまったから。

エ 人々が発する心無い言葉を聞いていると、お祭りに来なければよかったと思い始めたから。

問二

——部②「呆然とその場に立ち尽くした」とありますが、「呆然」としている「安」の様子を別の言葉で表してい
る部分と同じ【第2段落】にあります。その部分を八字で抜き出して答えなさい。

問三

——部③「おぼつかない」とありますが、これと同じ意味で使われている例文として、最も適当なものを次の中か
ら選び、記号で答えなさい。

ア 夢であったかもしれないと思われるほど、おぼつかない記憶しか残っていない。

イ 遠足が予定されている明後日の天気は、どうもおぼつかない。

ウ 英語の力を向上させるには、彼の行動が変わらないと実現はおぼつかないだろう。

エ 日本に來たばかりの留学生には、日本語がおぼつかない者がほとんどであった。

問四

A には、人間の身体の一部を表す漢字一字を含んだ二字の熟語が入ります。その熟語を漢字で答えなさい。

問五 — 部④「えも言われぬ磁力」とありますが、これを別の言葉で表現している部分が【第4段落】にあります。その部分を八字で抜き出して答えなさい。

問六 — 部⑤「キワが涙声で言った。れんをしっかりと抱きしめているようだった」とありますが、ここには「れん」に対する「キワ」のどのような気持ちが表れているでしょうか。二十〇四十字以内で説明しなさい。

問七 **B** に入る言葉として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア しかし イ すると ウ ちなみに エ それで

問八 — 部⑥「どくんどくん、どくんどくん、心臓が激しく高鳴っている」とありますが、「安」の心臓を高鳴らせている事がらとして関係ないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「えい」の口から教えているはずのない自分の名前が語られ、またその語り方には津軽訛りがなかったこと。
- イ お堂の中の静寂をかきみだすかのように、「れん」が「あつ」という大きな声を響かせてしまったこと。
- ウ 暗闇のなかで立ち上る靄のような、あるいはかすかな光のような何かをはっきりと感じ取ったこと。
- エ いつもはじっとしていることができず体をばたばたさせる「れん」が、一つとして身動きしなかったこと。

問九 — 部⑦「明かりを灯す」とありますが、その意味として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 紙に書かれた文字とは異なる新しい文字を考えて、その読み方や書き方を「キワ」に身につけさせること。
- イ 「れん」と「キワ」の二人だけが理解できる「サイン」をできるだけ多く作り出し、二人に身につけさせること。
- ウ コミュニケーションや世界の理解を確実に、またできるだけ簡単に行う方法を「れん」に身につけさせること。
- エ イタコの「えい」が「安」に与えた不思議な体験の意味を理解する方法を、「れん」に早く身につけさせること。

問十 【第4段落】中の〰〰〰部ア～エの「シャミセン」の中で一つだけ漢字の「三味線」で書き表すことのできるものがあります。その答えとして正しいものを文中のア～エから選んで、記号で答えなさい。

問十一 この物語に関する説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 青森県津軽地方の方言を登場人物の多くの会話文で用いることにより、東京からやって来た「安」がよそ者として地元の人々に理解されにくい人物であることを、読み手に強く印象づけている。

イ 突然「キワ」が姿を消したのを「れん」が鋭く気づく場面【第2段落】や、地蔵堂内にいる「キワ」に強く抱きつく場面【第3段落】などから、「キワ」をいとおしく思う「れん」の心中が読み取れる。

ウ 「自分が迷子になってしまったように」【第2段落】、「存在を消してしまったかのように」【第3段落】、「何かを捜すように」【第4段落】などの直喩を用いることで、人物や出来事のイメージを広げている。

エ 地蔵尊の堂内で起きた奇妙な出来事を描くことで、「れん」に対する教育が、これからは不思議な力に導かれて進められていくことをほのめかしている。

問七

問六

問四

問三

問一

A

点

B

問五

C

問二

問四			問三		問二		問一	
5	3	1	4	1	4	1	4	1
			5	2		(らす)		(う)
	4	2			5	2	5	2
				3		(らかな)		
						3		3
						(む)		

[illegible]

受 験 番 号	氏 名	

点